みじかい解説会【旅する野十郎】　　2021 年 10 月 23 日（土）

高崎市美術館学芸員　住田常生

「生誕 130 年記念　高島野十郎展」では、独学で油彩を描いた孤高の画家、**高島野十郎**（たかしま・やじゅうろう 1890－1975）を紹介します。野十郎は、ただ一本の蝋燭などに「写実」を追求する魂を込めました。昨年の生誕 130 年を記念して、新発見作品を含む 90 点によって、旅の足跡をたどるなど、新たな高島野十郎像に迫ります。今回は、昭和に入ってあこがれのヨーロッパに渡り、帰国した野十郎が「旅」から何をつかんだのか解説します。野十郎は一生旅を続けました。渡り廊下にアトリエの場所、写生地を年代順にご紹介する地図があるのでご覧ください。

## ①　あこがれのヨーロッパへ

1930 年、野十郎は 40 歳でヨーロッパに向け出航し、アメリカ、イギリス、ベルギー、オランダを経てパリに着き、イタリアにも足を運びながら、3 年間、おもにフランスに滞在します。ヨーロッパ渡航の目的を聞かれ、デューラーの絵の研究と答えましたが、ドイツには行っていません。旅費不足かもしれませんが、滞欧中の風景写生を見ると、むしろ目の前の風景を描くことに目覚めたのではないでしょうか。日本でも風景を描いていましたが、渡欧していっそう色鮮やかに、その場の季節感を呼吸しながら描いていることが、作品から生き生きと伝わってきます。《梨の花》にはゴッホの影響がまだ色濃く残っていますが、**《秋葉散る頃》**では無心で風景に向き合っています。水辺の風景が多いことにも気づきます。鏡のように景色を映し、流れるまま表情を変える水面をみつめ、大気の拡がりや水のうつろいを描く難しさと喜びに、気づいたのかもしれません。

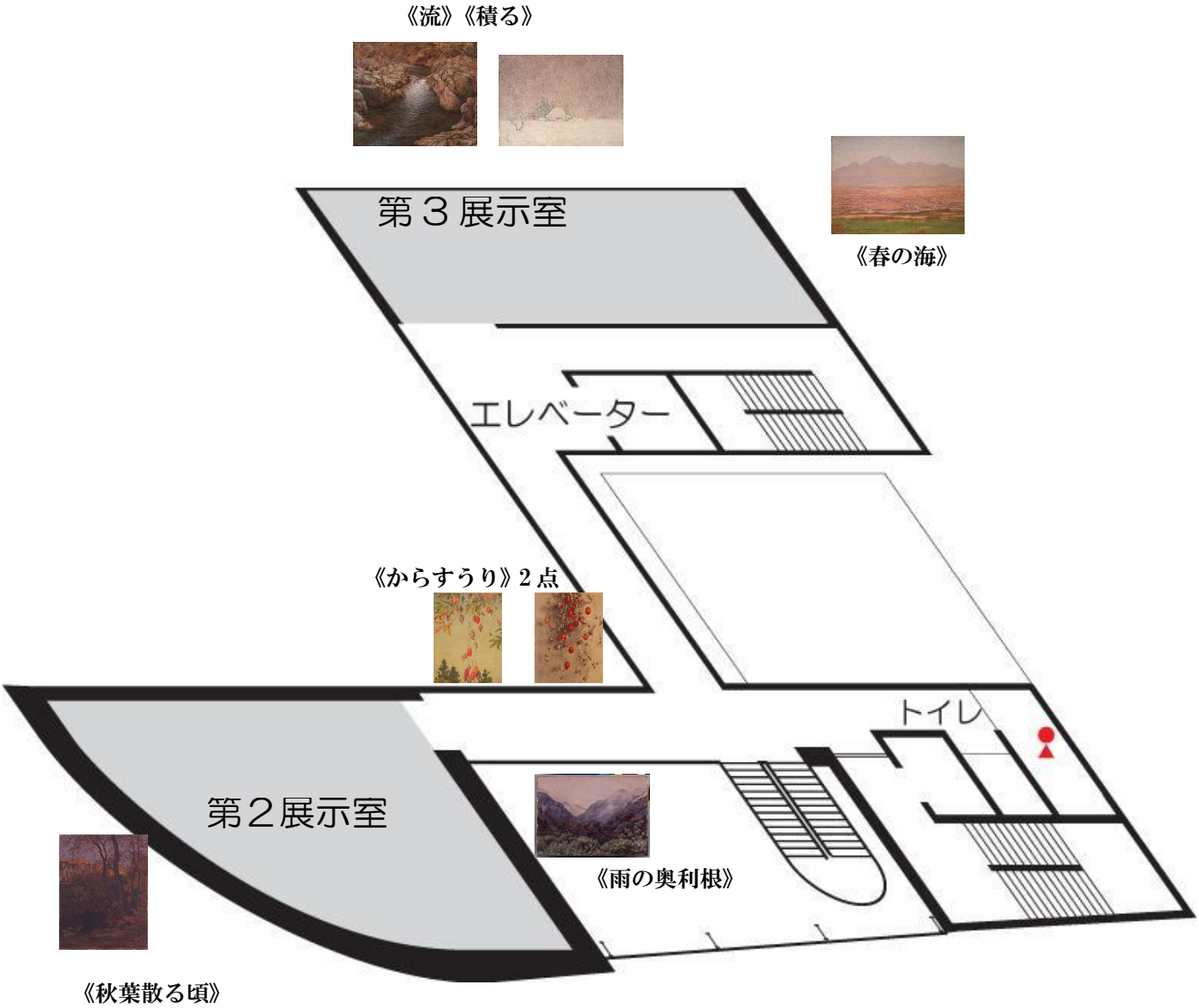
## ②　帰国ののち

1933 年、帰国し実家に戻ったのは、それまでの野十郎ではありません。実は描きためた 106 点による大個展を渡欧前開いたのち、大半を焼いてほしいと頼んで出発したのです。幸い 20 点ほどは残され、現在見ることができますが、帰国後、意気込みどおり絵が変わります。それまでうねるような線が目立ちましたが、今の群馬県利根郡に取材する**《雨の奥利根》**ではタッチが細かくうねりはありません。油彩一本の野十郎ですが、雨上がりに霞むもやには、少年時代流行した水彩のような水気や透明感があります。水辺に取材した渡欧をへて、水気の多い日本の風土に気づいたのかもしれません。樹々を取り巻く光や空気にさえ、手触りやその場で呼吸する臨場感があります。思いまかせの線をうねらせるのではなく、細かいタッチで自然に寄り添う。実家の庭にアトリエ「椿柑竹（ちんかんちく）工房」を建て、兄、宇朗には**「ひとりよがりではなく、世にうけいれられる絵を描かなければならない」**と語ります。みずからの心を表現し、独り修養に努めるだけでなく、人に手渡さなければ―。野十郎は自然を描くことで開眼したのです。

## ③　濃密な空

ここで 2 点の**《からすうり》**を見比べましょう。1935 年、45 歳作は椿柑竹工房で描かれたもの。背景の壁の手触りを伝える写実ですが、戦後作の背景は空。静物であり風景でもある不思議な絵です。静物と風景、からすうりと空をへだてなく、同じ密度で描く野十郎らしい作品。**《流》**は秩父三峰の登竜橋付近に取材したと思われます。**「数日間、水の流れを見ていると、流れが止まり、巌（いわお）が動きだした。私は動いている巌を描いたのです」**と語ります。何時間も水をみつめ、岩がたたずむ気の遠くなるような時の流れそのものを見たのでしょうか。描かれるのは水でも岩でもなく、一体に流れ動く時なのかもしれません。70 代の野十郎は、雪景色を求め東北を旅します。素描や写真をもとにキャンバスに木炭や鉛筆デッサンをして、2、3 年かけて油彩を完成させた野十郎ですが、素描や写真はあまり残されていません。しかし山形県小国町付近を描く**《積る》**の素描は残されており、**「地平線雪と空　やっと区別」**と読めます。天を覆う点描の雪で平らな絵になりそうなところを、点に大小をつけて深々とした奥行きを生み出しています。野十郎はここでも雪と空と大地を境なく描き、澄んだ冷気や人家の温かさを一体に感じさせます。**《春の海》**では故郷に近い熊本の有明海を描きます。トラブルから 1936 年に上京したのち実家に戻りませんでしたが、自然、故郷に足は向かい、幾度となく杖を休めます。亡くなるまで手元に残したこの作品からも、心の旅だったことがしのばれます。**「これは空気を描いたのだ」**と語りましたが、春の有明海と、春霞に浮かぶ雲仙岳を描きつくして余すところがありません。春の香りと郷愁に染まる空気は、心模様を映す空（そら）であり、一切を受け止め包み込む空（くう）なのかもしれません。何もない空間ではなく、満ちる思いを映すだけでなく、身のまわりにあるものと、ないものをへだてなく包み込む濃密な空なのです。

「旅する野十郎」

展示室のご案内

２階